

平成28年度 第1回 豊田市環境審議会【自然共生部会】 会議録

【日 時】 平成28年6月21日（火）午前10時00分～午前12時00分

【場 所】 豊田市役所 南庁舎 南52会議室

【出席者】

（委 員）

部会長	高野 雅夫	（名古屋大学大学院環境学研究科 教授）
	篠田 陽作	（名古屋経営短期大学子ども学科 講師）
	島田 知彦	（愛知教育大学教育学部 准教授）
	大熊 千晶	（日本野鳥の会 チーフレンジャー）
	光岡 金光	（豊田市自然愛護協会 会長）
	山内 徹	（市民公募）

（事務局） 加藤環境政策課長、小木曾環境政策課副課長、塩谷環境政策課担当長、鷹見環境政策課担当長

【次 第】

- 1 開会
- 2 部会長あいさつ
- 3 委員紹介
- 4 議題
 - （1）環境基本計画の改訂について
 - （2）現行計画の進捗状況について
- 5 閉会

I 開会

1 部会長あいさつ

部会長： 環境基本計画は今回、全面的な見直しを迎える。委員の皆さんはそれぞれの分野で豊田市の生態系を見てきた専門家だと思う。まずは、677市の取り組み状況・自己評価を聞いた後、次回に委員からの評価・提言を頂き、両者をまとめて計画骨子を作成したいので、忌憚のない意見を語って頂きたい。

2 委員紹介

一人ずつ自己紹介

II 議題

1 環境基本計画の改訂について

事務局： (資料1、資料2-1、資料2-2に基づき、説明)

A委員： 計画の役割に示す「具体・詳細施策は…下位計画に示す」の意味がわかりにくい。5つの分野、特に「環境行動力の向上と共働」「安全・安心」について、それぞれどの下位計画に対応するのか。

事務局： 「環境行動力の向上と共働」「安全・安心」は、下位計画はない。特に「環境行動力の向上と共働」については、どの分野にも関わることであるので、それぞれの計画に盛り込んでいく内容である。

A委員： 下位計画がないものは、具体・詳細施策をどこに示すのか。

事務局： ある程度環境基本計画で盛り込んでいかざるを得ないと思う。そのあたりを今後検討していく必要があると考えている。

部会長： 自然共生分野では、生物多様性とよた戦略をどう位置付け、どう活用していくか検討が必要である。

2 現行計画の進捗状況について

事務局： (資料3及び参考資料に基づき、説明)

B委員： 「生物多様性とよた戦略」で示されている短期的にやるべき点は重点的に取り組まれている。

戦略の中では、中期的な取組として「生物標本の適切な管理・活用する拠点の整備」などが示されているが、そういった取組は進んでいるのか。具体的にどういったものを想定しているのか。

事務局： 現在は、自然観察の森旧ネイチャーセンターで標本を管理している。

戦略策定当時の規模感はわからないが、環境政策課所管の施設として単独で設置する予定はない。

豊田東高校跡地に新たな施設の建設予定があり、具体的な内容は決まっていない。その中に標本資料の展示ができないか、打診しているところである。

C 委員： 標本は、ネイチャーセンターの予算の範囲で保管しており、これ以上の収蔵は難しい。生物標本は、豊田市の自然環境を把握する重要な資料であるので、豊田市内の施設で管理するのが望ましい。

D 委員： 博物館的収蔵庫が最も費用がかかる。慎重に考えるべきである。

D 委員： 今回、方法論として他の部会員からの意見を出せることはよい。施策には、分野をまたがった効果があるものがある。当該部会での視点だけでなく、他の部会でのメリットを示し、有機的なつながりが必要である。

分野間をつなぐ働きをするのが、環境教育である。現在の環境教育には、知識を教える教育が中心である。しかし、自分で気づいて判断できる子どもを育てる教育が大事だと考える。各部会でこういったことを見据えて連携することが必要である。

部会長： 平成24年度における下山地区の哺乳類の調査データが多いが、これはテストコース開発の際の調査か？

これが特別なのではなく、人と費用をかければ豊田市の山間部では同じような調査結果が得られるのか。

事務局： そのとおり。

E 委員： インタープリターの育成については、どのように考えているか。現在、インタープリターと呼べる組織があるのは、自然観察の森と eco-T しかない。eco-T のインタープリターは、生物多様性についての知識は乏しく、自然観察の森のインタープリターも施設内の案内はできるが、豊田市全体の案内をできる人はいないので、こういったグループを作る必要があると考えている。

E 委員： オオキンケイギクのことには知っていても、駆除する人は少ない。

A 委員： オオキンケイギクに限らず、まずは大勢の人に知ってもらうことが大切。ごみの分野では、分別のためにお金をかけて広報している。現状では自然共生に関する周知・啓発は不足しているのではないか。

D 委員： 役に立つインタープリターの養成は、しっかり時間をとって行うべき。

C 委員： 外来種の問題があげられているが、蛙やメダカを放流したいとの相談がある。海外からの移動だけでなく、国内の地域間の移動も問題であるので、取り上げるべき。アメリカザリガニも在来種に対する影響が大きいので、駆除は現実的に難しいと思うが、外来種問題として取り上げてもらいたい。

C 委員： 中小企業では、生物多様性で何をしたらいいかわからないというところがある。現在は、相談の受け皿がないので、講習とともに受け皿が必要ではないか。

A 委員： 「エコ企業施設ガイド」の作成部数と配布先を教えてください。費用はかかるが、各企業に配布し、取組を促すことが重要である。

- 事務局： 「エコ企業施設ガイド」は、初回 1000 部印刷し、企業、小学校、環境関連公共施設で配布した。その後 2500 部増刷し、「eco-T」と「エコフルタウン」で配布した。今年度も増刷を予定している。
- D 委員： 愛知県のある企業の社員研修をモリコロパークでやろうとしている。企業が持続可能な社会の中で環境にどのように配慮するか、責任があるのか等、このようなことを豊田市の社員研修でもやってはどうか。
- D 委員： 先のメダカの話であるが、名古屋市では植物園でメダカを繁殖している。小学校などから提供の申込みがあると、名古屋の純粋種を配布できる仕組みになっている。移動を規制するだけでなく、豊田市原産のメダカを作るなどの仕組みづくりが必要ではないか。
- 部会長： 人工林について多額の費用をかけて住民とともに熱心に取り組んでいると評価できる。
「森の健康診断」では木の密度が高くなると生物多様性が下がることがわかっている。間伐によってどのような効果があるか、まだわかっていないが、市民の調査からこうした発見があったことは評価すべきである。
「木の駅プロジェクト」も先進的であり、取り上げてほしい。
こういった市民の共働によって成果が上がっている事業を取り上げられると良い。
- A 委員： 資料 3 の事業レポートでは、農業との関係が少ないように思う。営農と生物多様性について取り上げてはどうか。今の農業では、田植えの時期など濁った水を流しているが、工事の場合には調整池を整備するなどの配慮がなされている。農業に対する働きかけが必要ではないか。
- 部会長： 有機農業促進法ができ、環境保全型農業推進事業が行われている。しかし、1 件あたり 10 万円程度の助成と少ないので、もう少し手厚くならないか。
- D 委員： 県の農業基盤改良の際には用水路の構造等、環境に配慮する取組が行われており、豊田市でも取り上げてはどうか。
- 部会長： 移住・定住促進も、移住した人が有機・自然栽培に取り組むことがあり、大事な役割を果たしている。
- 部会長： 湿地保全の方向性が定まっていないとのことだが、これについてはどうしていくつもりか。
- 事務局： 各湿地に保全団体があり個別に対応していただいている。愛護協会による指導もしていただいているが、統一的な保全の仕方がない状況。会を設けてご意見を頂く予定である。
- D 委員： それぞれの湿地に一つずつ団体があるのはよいことである。湿地の保全作業は、ある程度専門性もあり、長年取り組んで経験を積む必要がある。強化のために、年に 1 回専門家の話を聞いて各団体間で保全の仕方を共有したり、それぞれの湿地を見て回るという取組も必要だと思う。

- A 委員： 3つの湿地を管理する団体を新たに作った。個々の湿地の特性に合わせた保全作業の方向性はあるが、ラムサール湿地全体の方向性を検討して行くことが必要である。
- 部会長： 里山も同じだが、放っておくと遷移するものに、どこまで手を入れるか。かつては活用していたから維持できていた。生業として関わっていたものがなくなっただけ、手間やお金がかかるが誰が負担するかという問題もある。
- E 委員： 里山整備の後継者づくりも課題である。
- D 委員： 子どもの頃からの体験型環境教育が有効であると思う。
- E 委員： 森林課のセミプロ養成講座が報告されているが、時間が経つと仲間が減って行く問題がある。また、地主が遠隔地にいるという問題もある。
- 部会長： 次回までにご自分の視点で豊田市の生物多様性の状況、気になる点、成果のあった点、新計画に盛り込むべき提言を、A4用紙1枚程度でまとめて提出して頂きたい。次回の会議で報告をしてもらいたい。また、矢作川研究所の知見も反映したいので、話を聞きたい。7月の審議会には本日の内容を報告する。

Ⅲ 閉会挨拶

以上 第1回自然共生部会 終了